

行政視察報告書

令和7年10月31日

長浜市議会議長 伊藤 喜久雄 様

長浜市議会議員 _____ 村山さおり

私が出席した次の行政視察の結果について報告します。

記

1. 観察等名 令和7年度健康福祉常任委員会行政視察研修

2. 観察期間 令和7年10月22日（水）～10月23日（木）

3. 観察場所及び目的

①大阪府泉大津市

健康増進施策あしゆびプロジェクト、マタニティ応援プロジェクト

②大阪府豊中市

療育（0歳～就学前）

4. 調査内容感想等

・観察の目的

泉大津市…当市でも少子高齢化が進む中、高齢者の寿命だけではなく、健康寿命を延伸するかが課題であり、泉大津市のあしゆびプロジェクトは、総務省の地域連携事例集でも紹介されており、取り組みの経緯や成果の聞き取り。

また、マタニティ応援プロジェクトでは、妊婦に毎月10kgの金芽米を贈っている。その経緯や目的、効果等の聞き取り。

豊中市…療育の先進的な取組の視察

・視察内容

・泉大津市…「あしゆびプロジェクト」については健康こども部健康づくり課より説明を受けた。あしゆび運動を市民運動として広く知ってもらい、幼児教育から高齢者の転倒防止、フレイル予防などを含む健康寿命の延伸まで、足指から展開する健康プログラムを「官民連携」「市民共創」のもと進め平成30年度にスタート。乳幼児期、幼児期、学童・思春期、青・壮年期、高齢期すべてのライフステージに向けた取り組み（親子で運動遊び教室、体幹プログラム研修、あしゆび体幹体操等）が実施されていた。

きっかけは市長からのトップダウンで、市長の交流関係の広さもあり、大学や様々な民間企業との連携や協力が得られていた。また、府内での横断的連携もされていることで、健康への意識向上や運動習慣の定着が進んでいた。

マタニティ応援プロジェクトについては、健康こども部子育て応援課より説明を受けた。妊娠の届出をされた方の中から希望者に毎月10kgの金芽米を贈る企画で、新型感染症に際し感染しにくい、感染しても重症化しにくい身体づくりが重要で、「食」から健康を支える取り組みとして始まった。

令和5年度から令和6年度途中までは、お米とその送料をメーカーが負担。今現在も市の予算で継続中。

対象者のアンケートでは経済的に助かるという声はもちろん、この企画がきっかけで、「お米だけでなく他のものも体にいいものを選ぶようになった」「パンや麺からお米中心の食事になった」等の行動変容が報告されていた。

・豊中市…生ごみ堆肥化プロジェクトからの提案を受け、平成14年「緑と食品のリサイクルプラザ」開始。豊中市の小学校35校から出る残食と、2か所の給食センターからの調理くずに木材チップを混ぜて、堆肥「とよっぴー」を作つておられた。（中学校は弁当持参または仕出し弁当）

毎日22,600食の給食を作つておられて、年間130トン弱の残食。一方当市では南部給食センターは毎日7,000食強で年間113トンほど（豊中市はパンも含んでいるが、長浜市はパンや麺、デザートは含んでいない）ということで原因を探りたいと思った。

「とよっぴー」は施設周辺の体験型農園で使用されたり、市民に配布（無料・有料）されているとのこと。

豊中市立児童発達支援センターでは幅広い事業が行われていた。

障害児通所支援事業（外部委託）、こども療育相談事業、診療所、その他（障害児一時預かり事業等）

センターでは相談事業に注力されていた。保護者支援事業では、診断の有無にかかわらず、ペアレントプログラムやペアレントトレーニングが行われていた。

当市では、就学前まで療育に通い続けたいが叶わない保護者がいるので、そのことを質問したら、就学直前まで通うお子さんはほぼおられないとのことで驚いた。保護者支援の充実がこのような結果につながっているとのことでペアレントプログラムの内容を見てみたいと思った。

施設内も見学させていただいたが、施設や当局の方は福祉上がりの方ばかりで、お話を聞いていても、とてもいい関係性というのが伝わってきた。

・行政視察の結果を本市にどのように反映させるか

当市でも少子高齢化は深刻な問題であり、いかに高齢者の健康寿命を延ばすかが課題である。その観点からでも、あしゆびプロジェクトのような全世代に普及できる施策は、市民の健康意識向上に有効であると考える。

また、民間企業や大学との連携も重要である。

すでに様々な健康体操やビワテクなども広く広報されているが、幼少期からの足指の使い方を見直すきっかけづくりを探りたい。

豊中市と長浜市の給食の残食を比較すると豊中市が約 5.9 kg、長浜市は約 16.1 kg と大きな差がある。豊中市は小学校のみ給食なので、その影響があるかもしれないが、長浜市の残食の軽減は課題である。家庭からの食育の推進を改めて考える必要があると思う。

児童発達支援センターに関しては、就学直前まで通所するお子さんがほとんどいないことに驚いた。そこには保護者へのはたらきかけが大きいように思う。児童発達支援センターの伴走支援が直接的なものでなくても、安心して地域の園に通いながら、何か心配なことがあればいつでも相談できるという安心感が生む結果なのではないかと考える。当市の児童発達支援センターの職員さんにもこのことについて意見を聞きに行き、どのような伴走支援がいいのか探りたい。